THE BSSC JOURNAL
びわこ成蹊スポーツ大学新聞 Biwako Seikei Sport College
びわこ成蹊スポーツ大学の「今」を伝える
© THE BSSC JOURNAL 編集部
発行＝びわこ成蹊スポーツ大学 メディア研究会
〒520-0503 滋賀県大津市北比良1204番地
http://www.bsscjournal.net/
2006 Vol. 1
THE BSSC JOURNAL
通巻1号 2006年4月1日発行

大学院設置と第2キャンパス建設

成度完年

将来構想まとまる
まず07年 定員1.5倍へ

先端分野 新コースも

雄大な比良山系と広大な琵琶湖の湖面に囲まれた現キャンパスの北側が第二キャンパスの建設予定地

びわこ成蹊スポーツ大学（森 昭三学長）は、開学〇三年四月から四年目となる〇六年度、一回生から四回生までの全学年が揃う「完成年度」を迎えるに、かねてから学内で検討を続けてきた教育環境の拡大・充実策として、現定員（一学年180人）の二倍増（最大）と大学院設置、さらに現在地の隣接地に第二キャンパス建設を骨子とする計画案がまとまった。一部は近く文部科学省への届け出を予定するなど、具体化に向けてすでに動き出しており、順調にいけば早くて四年後の一〇年度末までには実現させたいとしている。

同計画によると、まず定員増は〇七年度から現在の180人を90人増やし一・五倍増の270人とする。すでに文科省大学設置審に変更届を提出する準備を終えている（三月末現在）。さらに一〇年度をめどに、二倍増の360人に増やすとともに、大学院（修士課程）設置も将来構想に組み込まれている。

また、定員増にともなって学科構成も変更される予定。現在の1学部（スポーツ学部）2学科（競技スポーツ、生涯スポーツ）の大枠は変わらないが、各学科各3コースに加え、新たに競技力向上の科学的手法として各国で導入が進む先端研究分野が、「スポーツ情報戦略」コースとして競技スポーツ学科に誕生する。

これにともない各学科の定員にも変更が出る。入学後の進学希望者が多い現在80人の競技スポーツ学科は150人へと70人増え、20人増の生涯スポーツ学科（現行100人から120人）を増加数でしのぎ、両学科の定員数が逆転する見込み。編入学定員も現行40人から20人となりそうだ。

こうした教育・研究環境の増強によって、施設面でも拡大・拡充の必要性が強まるため、まず〇七年度からの定員一・五倍増に備えて、これまでなかった400人収容の大教室や180人収容2教室を含む、新講義棟（地上2階）の着工準備が現講義棟の西側（元駐車場）ですでに三月中旬に始まった。これを皮切りに、施設拡充の切り札として第二キャンパスの建設が計画案に盛り込まれた。

第二キャンパスの予定地は現敷地（約八・八ヘクタール）の北側を上回る、約十ヘクタールの隣接地が有力候補。ここに大小の講義室や研究・実験室を備えた2棟や、多目的グラウンドとテニスコート、学生クラブハウスに野外教育の実習ゾーンなど、総予算15億円（推定）にのぼる整備計画が青写真として描かれた。用地買収を〇六年度中にも終え、一〇年度までに完成させたい、としている。

「わが国唯一のスポーツ大学」として、「新しいスポーツ文化の創造」を理念に掲げて開学した少子化に加えて、他大学でもスポーツ分野に特化した学部・学科を次々に開設している。このため本学の質をより高く、他大学との差別化を鮮明にしていかなければならない。完成年度だからといって足踏みすることなく、新たな飛躍を図っていく。

07度からの定員増

（予定、カッコ内は現行、単位＝人）

	競技スポーツ学科	生涯スポーツ学科	計
入学定員	150（80）	120（100）	270（180）
3年次編入	12（15）	8（25）	20（40）
計	624（350）	496（450）	総計1120（800）

競技スポーツ学科新コース名（07度から、カッコ内は現行）
コーチング（コーチング・技術）スポーツビジネス（マネジメント・情報）スポーツ情報戦略（新設）トレーニング・健康（変更なし）

次なる飛躍を目指して

飯田稔・副学長

初めて集めてきた。しかし、入試などで高い人気をのスポーツ大学として

総合型スポーツクラブ
Biwako Sports Club 誕生

豊かな自然環境との共存
健康で活気ある町づくり
協働へ

すでに学生164人登録

地域と協働（コラボレーション）し、地域への貢献を目指して、開学時から、地元・志賀町（当時）の関係機関とともに準備を進めてきた、総合型地域スポーツクラブ「BIWAKO SPORTS CLUB」（略称BSC）の設立総会が一月末に開かれ、誕生した。すでに学生164人（三月末現在）が、同クラブの「ボランティア・指導者バンク」に登録。五月のスポーツ教室を皮切りに開催される、各種イベントの準備に追われている。

注目浴びるびわスポ大

総合型地域スポーツクラブは、生涯スポーツ時代の到来に合わせ、文部科学省が00年に策定した「スポーツ振興基本計画」に基づき、全国でこれまでに約1800が設立されており、滋賀県内でもBSCは26番目。BSCの特徴は地元に日本初のスポーツ大学が存在する点とされ、全国的にも今後の運営と成果が注目を集めている。

設立総会に250人

設立総会（志賀町民ホール）では設立準備委員会（発起人代表・豊田一成教授）、志賀町長や地元体協などの関係者ら250人が雨天の中を出席、「スポーツを通じた、志賀の豊かな自然環境と共存」「健康で活気ある町づくりへの寄与」などをBSCの目的に掲げた。また、記念講演・パネルディスカッションが高校サッカーで全国優勝を遂げた山田佳司・野洲高監督や元サッカーU16日本代表監督の松田守教授らをパネラーに開催され、「スポーツとアートの融合 新しい地域スポーツ文化の可能性」を語り合った。

＝岸田 洋

（3面に関連記事）

いよいよ正念場

就職戦線

内定第一号

足立 健吾君

ゼビオ
（東証1部上場）

開学以来初となる就職活動が、新4回生を中心に進む中で、就職内定者の第一号が、二月中旬、誕生した。

生涯スポーツ学科の足立賢吾君（園山ゼミ、野球部）で、内定先は大型スポーツ用品店「スーパースポーツ・ゼビオ」を全国で約150店舗展開している、ゼビオ株式会社。同社は資本金157億円、売上高約967億円（05年3月期）の東証一部上場企業（本社・郡山市）。

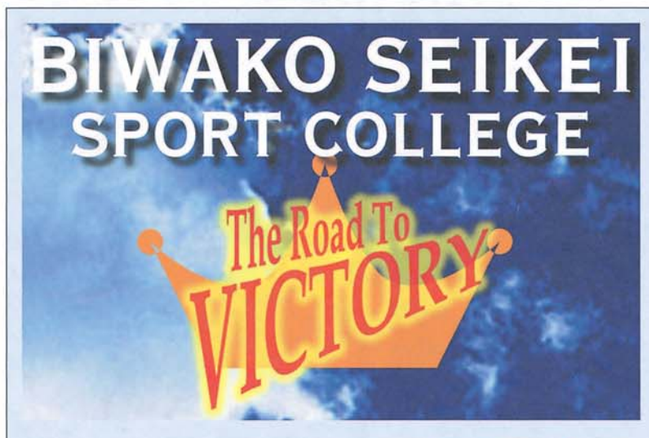
また第二号は三月初めに、競技スポーツ学科の岸田直己君（小松崎ゼミ、野球部）がドイツでは製薬会社トップの日本法人、日本ベーリンガーインゲルハイム㈱から内定通知が届いた。同社の本社は兵庫県川西市で資本金72億円、売上高796億円（04年3月期）。

就職課によると、4回生の一般企業への就職活動は3月末現在、インターネットによるエントリー選考（書類選考の一種）が終り、一次面接に進んでいる段階が多く、四月から五月にかけてピークを迎える。また教職希望者は同じ四月から五月に各都道府県の願書配布が、続いて採用試験の第一次が七月から始まり、八月にはピークに入る。

（2面に関連記事）

ホームページでも購読を

びわこ成蹊スポーツ大学新聞の電子版は、下記のホームページでご覧いただけます。携帯電話からはブログ版が簡便です。
公式サイト→ http://www.bsscjournal.net/
携帯用サイト→ http://index.bsscjournal.net/?pid=5125



飛躍とゼロから道半ば

開学から4年目を迎えようとしている。3年目の昨年、サッカー部を皮切りに、続いて野球が念願の一部昇格を果たし、陸上でも西日本インカレの優勝者を出すなど、ようやく「ヴィクトリーロード」に"びわこブルー"が躍り出し始めた。その一方では、OBも先輩もいないゼロからスタートした道もいまだ半ば、生みの苦しみを続けるパイオニアたちも少なくない。

（2-4面に続く）

過去4年間の入試データ（単位＝人）

	受験者	合格者	平均倍率	入学者
03年	1345	270	4.98	237
04年	1028	266	3.86	235
05年	1115	248	4.50	211
06年	935	283	3.30	209

（05・06年度は3年次編入を除く。06年の入学者は予定）

初めて受験者1000人割る

06年度の入学試験は、三月六日の一般B日程を最後に、終了した。入試課がまとめた入試データによると、同年度の総受験者数は935人で、03年度の開学以来、初めて1000人を割り込んだ（3年次編入を除く）。合格者数に対する平均倍率も3・30倍と開学以来の最低を記録した。3年次編入試験（受験者計106人）を加えた平均倍率は3・22倍。入試9部門のうち最高倍率はAOの8・03倍で、4・93倍の公募推薦、4・03の一般A日程と続いている。

びわこ成蹊スポーツ大学は、従来の体育大学にないカリキュラムが注目を浴び、関西を中心に全国から学生を集めてきた。この三年間の受験者数は、減少傾向がみられるものの、新設大学としては比較的高い倍率で推移してきた（入試データ別掲参照）。しかし、年々進む少子化現象に伴った「全入時代」（志願者数が大学定員の総数より少なくなるため全員が入学可能）を前に、大学間の競争は激しくなる一方で、今回着手が始まった将来構想は、その対策との側面が濃いようだ。

＝小田康人

サッカー
Football

部員数は150人を超え、06年度には200人に迫ろうかという、本学最大の規模を誇る。部員本人の希望と選抜試合を経て、学連と社会人両リーグに各4、計8チームを結成。学連トップ（びわスポ大Ⅰ）は3年目にして1部昇格を決めるとともに、全日本天皇杯本選に初出場を果たし、2回戦突破と創部3年目にして大健闘。社会人チーム（ROSEGE＝合同チーム）も滋賀県1部リーグで4位、4強リーグで3位の結果を出した。

1部が強いとは感じない
万能型FW 坂井優介

けないジャンプ力。相手を背負っても潰されないガッチリとした躯体の強さ。〝裏〟へ飛び出す一瞬のスピード。どれをとっても大学レベルではかなり優秀である。

さらには、自分のプレーを冷静に分析するクレバーな一面も覗かせるが、「FWとしての自分の役割は、やはり気持ちですね」。

天皇杯や1部での厳しい試合をこなしてきたので、「1部ですか？強いとは感じない。もう慣れました」と軽く答える。

「びわこ成蹊スポーツ大のFWといえば？」とたずねれば、多くの人は「近藤岳登」と答えるだろう。その近藤を支えているのは、2トップを組む坂井優介に違いない。

身長165㌢、FWとしては決して大きくない。しかし、180㌢近くある相手センターバックにも、ヘディングでは負けない。

「この1年・主な成績」
全日本天皇杯3回戦進出（2・1大分、3・0佐川急便中国、ヴァンフォーレ甲府1・0）▽関西学生春季2部B・優勝＝1部昇格▽同1部・9位▽同優秀選手・近藤岳登▽同1・2部入れ替え戦2勝1分（大経大）＝1部残留▽滋賀県社会人1部・4位▽4強戦・3位▽同3部A優勝＝2部昇格▽ジェルテック杯年間優勝決定戦2位

一年生にして社会人チーム2部の監督兼選手。

サッカーと社会勉強の日々に充実感
社会人チーム2部監督兼選手 川西慶男

「将来は教員となってサッカー部の顧問」を夢見て、「まだまだ監督としての仕事は出来ていないですよ」と言いつつ、「社会勉強も出来る環境」に充実感をかみしめながらの、毎日が続く。

「学生時代から取れるライセンスを取得し、将来のサッカー指導者として指導やチーム運営の経験を積む」（松田守部顧問・教授）との基本方針から、各チームでは原則として監督やコーチなどすべての運営を、学生が自分たちで担う。

この新人監督も、高校一年時にDFとして全国大会の大舞台を踏んだ実績を持ち、常に周囲を見渡せる資質を見込まれて、誕生した。

練習予定を作り、試合を組むなど、いわばチーム勝利への執着心が爆発する日も近い。

＝水谷隆太（さかい・ゆうすけ 3回生）

応援バス3台で約120人の学生らが熱い声援。

◇天皇杯三回戦
05年10月9日、小瀬陸上競技場（山梨）、観客数1648人
ヴァンフォーレ甲府（J2）
1（1-0）
（0-0）0

びわこ成蹊スポーツ大学（滋賀）
GK 1 小松 直哉
DF 23 吉岡 太史 24 中井 拓作 4 門岩 敬太 7 金井 龍生
MF 3 石本 哲也 6 宇野 勇気 15 榊 碧平 今井 昌太 FW 10 近藤 岳登 F 22 坂井 優介
MF 18 高島 佑貴 W 11 三反田 裕也 13 玉井 公平

ソフトボール
Softball

05年度から学生リーグに初出場、春季リーグでは3部で全敗だったが、確実に力をつけてきた結果が、秋季リーグ優勝という形に表れた。4月に行われる春季リーグでの予選突破を果たし、2部昇格を目指す。

[この1年・主な成績]
▽春季関西学生リーグ4／10～5／5（0勝4敗）▽秋季関西学生リーグ9／18～10／2（3勝2敗）優勝

信頼の友が最高の幸せ
05年主将 井上奈々

「今は、高校時代のような勝利思考はなくなりましたね。設備が整っていないし、人数も少ないけれど、自分たちで作り上げたチームだからこそ一つ一つの勝利がとても嬉しいし、何よりも充実していた。当時の私は、勝利思考がなによりも強かった」と当時を振り返る。

女子には多くないキャリアと、「ソフトボールを教えたかった」ので、この大学を選んだのも不思議ではない。部の立ち上げに加わり、主将としての活躍が続き、昨秋の関西学生リーグでは3部優勝を成し遂げた。が、すでに来季の目標として、「今季は守備がメインだったので、チームバッティングをしていきたい。そして2部上位を狙います」と、力強い答えが返ってきた。

＝冨村優子（いのうえ・なな 4回生 滋賀・滋賀女子高）

夢発見、エンジョイソフト
06年主将 奥村さゆり

教員を将来の進路として胸に描き大学の門をくぐった。が、3年が経った今、「体育からスポーツへ」を開学理念に掲げた、大学の雰囲気や部活動を通して、「子供たちにスポーツを楽しく教えたい」と、夢はより確かな姿になってきた。

中学では県代表として全国大会に出場した輝かしい経験を持つが、高校では陸上部に。しかし、スポーツ大学のなごやかな雰囲気に魅せられて再開したソフトボールは、「（体育の延長だった）中学での部活のイメージとまったく違う」と胸を弾ませる。

厳しい中にも、楽しい部活動。先輩が参加するキッズ向けのイベントで「楽しく出来るトレーニング」を教えてもらい、「遊び感覚で出来るトレーニング」があることを新たに発見する。「自分も楽しくスポーツを教えたい」「子供たちにスポーツって楽しいなって思われるインストラクター」を目指したい、と進路が一段と具体化。「実践を通して身に付く勉強」をしていきたいと意気込む。

＝山本知可（おくむら・さゆり 2回生 兵庫・篠山鳳鳴高）

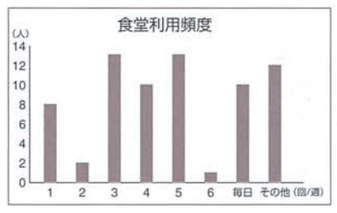
Campus Life

追跡シリーズ

学食

家族にあって「食」が「団らん」の中心であるように、「学食」の愛称で呼ばれる学生食堂は、ただ単に空腹を満たす場だけではない。明日の活力を充たすとともに、学友たちがともに集い、のちに「青春の一ページ」となる日々を過ごす空間でもある。より良いキャンパス・ライフを求めて展開する「追跡」シリーズ第一回は、まず現状の検証。70人へのアンケート調査で実態をあぶり出し、食堂側の回答と大学側の見解も求めた。（緊急調査のため別掲の3項目だけ、アットランダムの手渡しで実施）

なぜ混雑？券売機の配置変えたら？新メニューないの？



残念なことに、3割が「1週間に1回以下」という極めて低い利用率と、多岐にわたる不満の声が浮かび上がった。

まず、食堂の利用頻度。週に「3回から5回」（計36で51％）、「毎日使用する」（10・14％）を合わせると66％。スポーツ大学の特徴として、昼食のほかに練習の後など、1日に複数回の利用も考えられるが、1回を1日と読み替えると実に3人に2人が、授業のある週5日のうち3日以上も、利用していることになる。逆に、1日に複数回と解釈すれば、それほど利用頻度は高くないことになる。

どちらの解釈をとるか。その鍵は、12人もいた「その他」の存在ではないか。この「その他」とは、アンケート調査に計20人、29％とほぼ3割の学生が、「一週間に1回以下」となる。この数字は、キャンパス付近に、徒歩で行ける飲食店やコンビニがほぼゼロに等しい、わが「びわスポ大」の「食環境」から考えると、決して小さくない意味を持つ。

「毎日利用」14％、「利用ゼロ」17％ ほぼ3割「1週間に1回以下」

なかった「利用回数ゼロ」を意味する。つまりは、一週間に1回も学食に足を踏み入れていない学生が17％、10人に2人弱もいることになる。さらに一週間に「1回」の8人を加えると「1週間に1回以下」という極めて低い利用率と、多岐にわたる不満の声が浮かび上がった。

なぜ、17％が「食堂をまったく利用しない」のか、なぜ29％が「一週間に1回以下」なのか。その理由は後出の「食堂に対する不満や改善点」で、分かることになる。

食堂に対する意見、改善点を聞くと、「時間がかかる」「値段が高い」「メニューが少ない」という声が、全体の半分を占めている。このような結果から、学生のほとんどが食堂に対して不満を持っていることがよくわかる。

同時に、学生の改善したほうがよいという意見から、味の改善や、販売機への改善点など出ている。が、これらを改善していけば学食の見方も変わってくるだろう。

もっとこのような学生の意見を取り入れる姿勢が食堂側にあってもいいのではないか。

（関藤　健介）

「時間がかかる」「値段が高い」「メニューが少ない」

アンケート結果

時間がかかり過ぎる	26
値段が高い、もっと安く	25
メニューを増やして	24
券売機への不満（混む・場所を変えてほしい等）	19
味をもっと良くして	12
混雑する	9
効率が悪くみえる	8
量が少ない	7
メニューのバランスを良くして	6
厨房を広くしたほうがよさそう	6
その他	14

メニューの変更　4　、食堂を増やし競争させる　2、
メニューが売り切れる　2、店員を増やして　2、
もっと清潔に　1、店員の態度　1、
食券のシステムを変更　1　、メニューを渡すスペースを広く　1

澤井支配人に聞く

混雑・時間がかかる・効率が悪い　食堂の構造上、提供するスペースが限られているため、スピードが上がらない。食堂の構造は大学側の持ち物であり、食堂側はこの構造で運営するしかない。

価格　他大学に比べて安く、量も多い。他大学を見に行って研究し、価格設定してあるので、このアンケート結果には正直驚いている。

券売機　頭を悩ませている。配置を変えてもカウンターが混む。なかなか良い配置パターンがない。

メニュー　意見箱で現実的な提案をお願いしたい。今まで様々なメニューを試し、残っているものが今のメニュー。どのメニューがどの程度売れるのかの予想はしづらく、新メニューを次々に出すのは困難。意見箱の意見を参考に、改善していきたい。

味　かなり注意を払っているが、作り手によって味が違ったり、購入する時間帯によって味が変化してしまうという現実も理解し、注意している。

食堂側からの要望　学生さんもマナー向上をお願いしたい。マヨネーズやドレッシングを放置したり、テーブルを汚したままだったり。学食はレストランではないので、接客係がテーブルを拭いたりはしません。セルフサービスとしてのマナー、学生さんに望むことはそれだけです。

［記者の目］

アンケート結果と食堂側の意見を比較すると、学生の理想が高すぎるため食堂側の必死のサービスでもなかなか追いつかないでいるようだ。もちろん食堂側は「最善を尽くしている」つもりのようだが、日替わりランチは、「売切れにつき御免なさい」の意識でやっていたように感じた。

学生が学食で「安く・早く・おいしく」を望むことは当然。その一方で、食堂側の努力を容認する心を持ちたい。共に意見を出し合い、より良い学生食堂を作り上げていく同士として、互いに尊重し合うべきなのかもしれない。

（太田　明）

学友会でまとめて交渉を！

中川 徹 学生課長

キャンパス・ライフの主人公は学生なのだから、学生サイドがもっと頻繁に食堂側とコミュニケーションを取っていくべきでしょう。不満の多くは学生側が要望を出し、必要なら交渉することで解決できることが多いのに、学生側は黙って耐えている。例えば学友会で要望をまとめて働きかけたりすれば、もっとも効果があるのではないか。

フットサル Futsal

去年までのサークルから今年、正式な部として認められ、部員数は14人に。滋賀県社会人リーグ2部で3勝2敗1分。Biwako cup準優勝。1部・2部交流戦では1勝1敗1分。今季通算成績は10勝6敗3分。

普及と楽しいフットサル

主将　安田裕樹

キャプテンとして、「自分はキャプテンだ！という意識は持っていない。ただ大会の登録や部費などの仕事をしているだけですよ。自分がみんなを引っ張っていくのではなく、みんなで一つになり楽しいフットサルをしたい」と、笑顔を覗かせた。

最終目標は「楽しいフットサルをすること」、「フットサルの普及」だ。「今の僕たちのフットサルには余裕がない。試合を楽しんでやっているという余裕が…対戦相手のチームがびわ大のフットサルは楽しいと思うようなフットサルがしたい」。今度は笑顔も見せずに語った。

フットサルは足技・スピード・チームワークが必要な競技。部員の半分以上が大学に来てからフットサルを始めており、初心者が多いということがチームの課題。しかし練習風景は真剣そして明るい。部員全員が活発にボールを追いかけていた。

大会に出場して試合を重ねるだけでなく、フットサルを普及したいという思いから京都学生フットサル選手権大会の企画・運営を行っている、PSJという企業と協力し合い、大会の運営・審判などを行っている。PSJ、はフットサルの普及を目標に活動している、ベンチャー企業だ。

「これからも幅広い活動を続けて、フットサルの普及と自分たちが楽しいフットサルをすることを目標に頑張っていきたい」と、熱い想いを語った。

＝高長祐輔・高熊隆志（やすだ・ひろき　3回生　滋賀・近江兄弟社高）

［この1年・主な成績］
マBIWAKO CUP（4月）大学生クラス準優勝マ全日本大学西日本予選（8月）ベスト8マフルキャスト楽天カップ関西予選（7月）ベスト4マ全日本選手権滋賀県予選（11月）ベスト4マカレッジフットサルフェスタKANSAI06（2月）2位

スキー Skiing

総部員5人、大回転や回転などのアルペン、モーグルやエアリアルなどのフリースタイル、基礎スキーに分かれて活動している。オフの合同練習では、基礎練習や筋力トレーニングに励み、シーズン中は長期の合宿で各自個人練習に取り組む。

サークルではなく部活動として！

主将　成田　学

開学からさまざまな部活動が学生達の手によって創られてきた。その中でも多くの部が苦労してきたのは、やはり選手1人1人の意識やモチベーションではないだろうか。

最初は部員同士での意見の食い違いや、個々の練習風景はあったが。しかし、「学校から活動費の補助をもらい、部活動として登録している限り、ある程度の意識を持って活動しなければいけない」と指揮をとり、主将として部全体をまとめ上げた。

スキーを始めたのは3歳の頃、気が付いたらスキー板を履いていた。高校に入って競技として本格的にスキーを始め、今ではさまざまな選手権や海外の大会でも活躍している。「スキーの1番の魅力は生身の体で今まで体感したことのないようなスピードが出る所。一般の人でも時速60キロは出せるこのスピードがとても楽しい」。

このスキーの魅力を少しでも多くの人に分かってもらいたい。真剣に自主トレに励むその姿には、スキーに対する情熱と意思の強さが漲っていた。

＝斉藤寛樹（なりた・まなぶ　4回生　岐阜・本巣高）

夢は「生涯楽しむスキー」の伝道師

三賀泰弘

次期キャプテンとして、「これまで3年間、成田先輩が築いてきた部のカラーを、ぜひ後輩に引き継ぎたい」と、早速やる気に満ちている。「何事も諦めずに挑戦してみること」が、自分への合言葉であり、「生涯を通して子供から高齢者まで、スキーの魅力を知って楽しんで欲しい」との熱意が強く伝わってくる。

幼い頃から両親の影響を受けてスキーを始め、高校でアルペンスキーを本格的に始めた。今シーズンは完走率が悪かったと、「基本姿勢を正し、体勢を直すことが課題」と冷静に自己分析、目標を持って日々の練習に果敢に取り組む。

女子バスケットボール Basketball

昨シーズンは滋賀県学生代表として近畿総合選手権にも出場し着実に力をつけ、西日本インカレでは東海リーグ1部の中京女子大学を下し、関西の強豪・武庫川女子大学にも惜敗するゲームを展開した。しかし、関西学生リーグでは2勝5敗、8位で2部残留にとどまった。

バスケのためなら好きな人も捨てる

西村友里

「好きな人にバスケを捨てろと言われたら私はその人を捨てる」と言い切る。人生の8割はバスケットで成り立っている。練習嫌いの人が多いが、「練習もバスケット。だから練習も好き」と笑顔で語る。彼女はバスケットなしでは語れない。

大学に入りチームをまとめるうえで一番苦労したことが、意識の違いだと言う。「高校は全国大会に出たいと思い選んだし、自分以外の選手も同じ。だけど、大学はそれぞれの意識が全く異なる。意識目標の統一が、一番苦労した」。

しかし「バスケットが好き！」という熱く、強い思いで決してその障害に負けることはなかった。今までその熱意で自分自身に打ち勝ってきた。そしてそれが今度は個性豊かなメンバーと良い関係を築きあげるきっかけとなった。全員の目標はただ一つ「インカレ出場」。

バスケットに対する思いは限りなく熱い。その思いは決して消えることなく今後も燃え続ける。

＝川本麗美（にしむら・ゆり　4回生　滋賀県・滋賀女子高）

自分がやらないで誰がやるの

柴垣春奈

中学時代に京都府選抜メンバーに選ばれたのを初め小・中・高と一貫して主力選手で活躍しながらも、「今までキャプテンなどでチームをまとめた経験は一度もない」と言う。しかし、大学に入り「自分がキャプテンをやらないと、一体誰がやるんだ？」と自分の立場を改めて認識し、自ら立候補してキャプテンになった。

そんな積極的な気持ちの中にも、悩みを抱えていることは隠しきれない。「今までキャプテンをした経験がない上に、技術指導をしてくれるコーチがチームに不在なため、練習メニューやチーム構成を全て学生で行わなければならない」と口にした。

そんな少々の弱音も、チームメイトにはいっさい口にすることなく、常に強気の姿勢を貫く。

しかし、一選手の立場としては「周りの選手を使うことに意識し過ぎて、自分のプレイを見失ってしまうこともある」と、個人としての課題も明確にしている。

そして、今年最大の目標は「関西リーグ戦1部昇格！」と力強い。今までチームを支えてきた1期生と共に戦うのは、最後の年だから、なおさら「勝負の年！」と闘志を燃やしている。

＝井上高宏（しばがき・はるな　3回生　京都・市立紫野高）

BIWAKO SEIKEI SPORT COLLEGE The Road To VICTORY

ラグビー Rugby

創部から社会人リーグで活動していたが、06年度から学生リーグへの昇格が決定した。だが、最下位のDリーグからのスタートとなる。また、2005年1月に行われた滋賀県民体育大会でレークサイドクラブに敗れるものの2位。この勢いに乗り、なるべく多く部員を確保し、将来的には大学日本一を目指す。

13人制で手にした〝世界への切符〟

大藪弘佑

15人制と13人制のラグビー、それはルールもポジションも違うものだ。

去年の12月の選考会で、ラグビーリーグ日本代表の切符を手にした。一般公募で10月から月2回、東京でセレクションが行われていた。トレーニングや試合などの総合評価で、30人の中から21歳～30歳前半までの17人が選ばれオーストラリアで日本代表としてプレーした。

代表選手に選ばれたときは凄く嬉しかったが、それ以上に不安が大きかったという。すでにオーストラリアに留学し海外でプレーするという経験があった。そのため今回の代表の中でどこまでその経験を持ってチームを引っ張っていけるかが不安の元であったわけだ。国を背負って闘う責任感、代表選手ならこれくらいのレベルのプレーはできるだろうというプレッシャーを痛感した。だが、他の代表選手とお互いが持っている考え方やトレーニング方法の交換ができ、年齢に関係なく良いチームにしていくための意見を認めてくれるものだった。

ラグビーと出会ったのは小学校4年生。中学校で1度は辞めるものの、高校の3年間でまたラグビーに対する熱い思いが蘇ってきた。英語の勉強も兼ねてオーストラリアへの留学を決めた。

「ONE FOR ALL ALL FOR ONE～一人はみんなの為に、みんなは一人の為に～」の考えを大切にし、オーストラリアで同国コーチングレベル1を取得していたため、創部以来その技術を活かしキャプテンとしてチームを引っ張ってきた。「人間が生きていくために必要な食べることや寝ることのように、自分が生きていくためにはラグビーも必要だ。」という熱い思いが日本代表へと導いてくれたのだろう。夢へのチャンスを掴み、この滋賀県から世界へと大きく羽ばたこうとしている。＝山田優子（おおやぶ・ひろすけ　4回生　岐阜・関商工高）

［この1年・主な成績］
マ滋賀県社会人秋季リーグ（3勝2敗）マ滋賀県県民体育大会（2勝1敗）準優勝

男子バスケットボール Basketball

05年は予選リーグで今回注目の同志社大や龍谷大に勝ち9勝2敗で3位通過、1部昇格の可能性を残した。が、上位リーグでは通算11勝5敗で3位、惜しくも3年連続の昇格にはならなかった。3部リーグ戦では三田一磨が優秀選手賞受賞。

自分が動かないと誰も動いてくれない

男子主務　鍋島幸富

「自分が動かないと誰も動いてくれない」と大学とはそういうところである。今まで多くの人に頼ってきた私達は最初、そのことに戸惑い、行き先を見失う。しかし、そんな大学の性質を誰よりも先に感じ取り、上手く利用している。

この大学では多くの学生がそうであったように、中・高では部活漬けの毎日だった。与えられたメニュー、決められた目標…と用意された環境だった。

しかし、この大学ではそのような環境は用意されていなかった。今までとはすべてが違った。誰も動かない状況、自分の認識の甘さへの失望。それでも多くは他人任せにする風潮の中で立ち上がった。「自分が組織の骨組みを作る。自分が動かなければいけない」。それから、主務としての活動が始まった。

主務とは完全な裏方作業である。選手にプレイ以外で気を使わせないように注意を払うと同時に部の運営もしなければならない。

自分への評価は「勝つことは選手の力、負けることはスタッフの責任」と厳しい。そのため選手が純粋にプレイに集中できる環境作りに奔走している。

21年間生きて今ほど自分で考え、そして他人の為に動いたことはなかった。今後、チームも彼自身もどのように成長していくか楽しみだ。

＝三田　茜（なべしま・さちとみ　4回生　京都・大谷高校）

目標は高く大学日本一

太田　明

アルティメット Ultimate

創部当初はわずか5人、練習も満足にできなかったが、3年目の05年は37人の部員が所属。全日本学生新人選手権でオープン7位、レディース5位。また、初出場の全日本学生選手権では男子が4勝2敗で5位、女子が3勝3敗で5位を占めた。

「アルティメットで日本一を目指さへん？」。日本一…今まで自分には縁のない響きだった。陸上競技に毎日明け暮れた高校時代、自分の限界を感じていた。「この新しい競技に挑戦するか、悩んでいた。「この新しい競技なら、もしかして日本一に手が届くかもしれない」。返事は迷わずOKであった。

しかし、このニュースポーツはマイナーな競技。それゆえ、創部当初は様々な苦労があった。5人では試合もできず、協会にも登録できなかった。先生や他クラブの部員を集めて、ただディスクを投げ合うだけの練習も、「お遊びクラブとまで言われた。そのときは悔しいと思ったが、必死で頑張った。

2年が経ち部員が37人を数え、ようやく部として形を成してきた。「多くの部員の上に立って、引っ張っていくのは大変だが、非常にやりがいのある仕事」というように今、キャプテンとして練習メニューの作成、日程の調整といった仕事もこなしている。また、「マネジメント・情報コースで学んだことをクラブに生かせたらいい」と言うように、勉強とクラブをリンクさせることも忘れず、「目標は大学日本一」の合言葉を胸に、これからも突き進んでいく。

＝松本康宏（おおた・あきら　4回生）

生活と競技 二つのチャレンジが魅力

中薮慎太郎

「やっぱり日本初のスポーツ大学じゃないですか。だからニュースポーツをした方が、貴重な体験がたくさんできると思ったんですよ」。授業でほとんどの競技を体験してきたのはもちろん、個人的にもクラブなどで陸上や山岳、ゴルフ、そしてアルティメットと様々なスポーツに取り組んできた、チャレンジ精神が旺盛なスポーツマンだ。ビデオで試合結果の分析をするなど競技に対する積極的な姿勢も見せる。

「アルティメットの楽しさは満点。何よりも、ニュースポーツをする事で、新しい自分の意外な一面を発見できるチャンスがありますから」という。

いま一番の目標はチーム一丸となって、学生選手権の本戦に出場すること。なかなか勝てない日体大や大阪体大などとの実力差を埋めるためにも、基礎練習から本格的なフィールドを使った実戦タイプの練習を積み上げていく。

＝柴田健二郎（なかやぶ・しんたろう　3回生　滋賀・甲西高）

［この1年・主な成績］
マ全日本学生アルティメット新人選手権大会・オープン6勝2敗7位・レディース6勝1敗5位マ全日本学生アルティメット選手権大会・男子4勝2敗5位・女子3勝3敗5位

学生による、学生のための大学新聞
記者募集
希望者は研究棟3階
須田研究室まで。
(E-mail: suda@bss.ac.jp)

向上心と平常心で

06年主将　三田一磨

中学3年時には府選抜に、高校では3年連続のインターハイ出場と、チームの中心選手として貢献してきた。

ところが、大学では練習をあまり見られない監督に代わって、常に練習を見ている状況が続く。プレー以外にも、周りに気を使わなければならない。こうした中学・高校とはまったく競技環境が違う中、最初は戸惑いを隠せない時もあった、と言う。しかし彼は嫌な顔や態度を一切せず、逆に楽しんでいるようにみえた。もちろん、時には上手くいかない時もあったが「自分が思っている理想のチームを作る為に妥協しない」と、力強く言う。

この部活を通して、常に感じていることが、「チームメイトの大切さ」である。監督不在の中、時には選手との意見のぶつかり合いもある。「何でも言い合えるチームメイト。その場では仲が悪くても、一旦練習から離れると普段の仲の良い友達に戻る」と、チームメイトに対する信頼感は厚い。プレイに集中出来る環境作りや勝利に貢献できるような練習メニューをつくり、なおかつチームの中心選手として試合に出て活躍したい、という熱い思いを持っている。＝伊戸重樹（みた・かずま　3回生　和歌山・初芝橋本高）

［この1年・主な成績］
西日本学生選手権マ全関西学生選手権マ関西リーグ戦2部（11勝3敗）3位マ関西学生新人戦マ滋賀県総合選手権マ滋賀学生交流

総合型スポーツクラブ

絶好の「学びと実践」

びわこ成蹊スポーツ大学が地元と連携した総合型地域スポーツクラブ「BIWAKO SPORTS CLUB」（略称BSC）が設立された（1面参照）。これまで同じ名前のサッカー多世代型クラブを発展的に解消させ、多競技・多世代の総合型・地域密着型のクラブが誕生した。

このBSCは、大学が「地域との連携」「地域への貢献」を開学理念の一つに掲げて以来の懸案だった。大学側は地域のスポーツ少年団や行政、体協などの代表者と話し合いを続けてきたが、話がかみ合わず進まなかった。しかし、志賀町の大津市への合併を機に地元側の熱意が上がったのと、本学スポーツ開発・支援センターで担当してきた海老島均助教授の新ゼミ生と、学生代表として辻憲一郎さんらが熱心に活動を始めたことで、計画が急展開した、という。

スポーツ大学で生涯・競技両スポーツ学を学ぶ者にとって、スタッフとして設立から運営までが、すべて学んだことの実践力を身に付ける、絶好の機会である。

BSCは取り組む方向として、①自然環境を生かしたスポーツプログラム展開②大学と連携した様々なスポーツ医科学情報の発信・提供③指導者バンクによる指導者確保④会員制で行政の補助金に頼らず⑤個人と団体が補完し合う運営⑥常に創造的に進化するクラブ、を挙げている。

どの点をとっても「学びの実践」に適うものばかりだ。指導者のスキル向上やボランティア活動、イベント開催のマネジメントにメディア広報など、すべて格好の分野がそろっている。サッカー部員でもある辻さんは「教えてみて初めて指導の楽しさや難しさが分かった。その経験が自分のプレーにも役立てれば」という。

海老島助教授は「地域の人たちが『いつでも・どこでも・誰でも・いつまでも』手軽に利用できるコンセプトを実現したい」としたうえで、「学生の学びの実践ができる現場を、積極的に作っていきたい」という。

また、発起人代表をつとめた豊田一成教授は「あくまでも住民主体。大学の連携と支援によって、BSCは住民の多世代・多志向・多種目の多様なニーズに応えていく。その中で本学学生が学びを実践できるのは素晴らしいことだ」と期待している。（山田優子）

指導者バンクへの登録方法やイベント日程などはBSCのホームページ http://www.geocities.jp/biwakosports/に詳しい。

BSCの主なイベント

◇**アスリートコース** サッカー、陸上、バスケット、キッズサッカーアカデミー

◇**ライフスポーツコース** スポーツフェスティバル、ニュースポーツフェスティバル、ファミリースポーツラリー、親子ふれあい教室 等

比良・志賀駅の周辺で聞きました 世間の目 Community's Eye

もともと地域住民にお年寄が多かった大学周辺。本学開学で一度にどっと若者が大勢増えたことによって、地域にどんな変化を及ぼしたのか。そして、もっとも興味があるのは、本学ならびに学生の「評判」。そこでまず手始めに、学生に重要な"足"となるJRの比良・志賀両駅に降り立ってみた。

意外！志賀駅周辺では「大学があるの？」

比良駅周辺での知名度はもちろん100％。ところが、一つ手前の志賀駅周辺になると、なんと、大学があることすら知らない人がいた。大学に対するイメージを聞いても「特にない」というような回答が多く、関心が低い一端を知ることができた。

比良駅周辺「挨拶してくれるのが嬉しい」

「駅の辺りを若者が歩くようになり、少し活気がでてきて嬉しい」との好印象をもたれていた。比良駅周辺で、学生のイメージを聞けば、「多くの学生があいさつをしてくれるのが嬉しい」という良いイメージが多く、良いイメージとして固定しているようだ。

自転車2人3人乗り、ポイ捨て…悪いイメージも

その半面、悪いイメージも存在する。それは比良駅～大学までの通学態度。自転車の2・3人乗り、タバコや空のペットボトルのポイ捨て、道の真ん中を堂々と列を作って歩く…。周辺住民、特に畑で農作業を行っている人の願いとして「スポーツを専攻する学生なのだから、通学のルールぐらいは守ってほしい」との辛口もあった。

スポーツ施設を利用したいので情報を

食堂利用や大学祭への参加は多くみられたものの、体育館やジムなどの利用は、意外にも少なかった。大学の施設開放は、多くの人が知っているが、「いつ、どのような施設が開放しているのかという情報が全くない。入ってこない」という。多くの人が「利用したい」と答えているので、有効な情報提供を検討すべきだろう。

スポーツの成績に期待するだけでなく、風紀委員にも期待

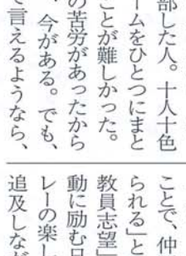
すべての人がスポーツの大会の成績に期待してくれている。特にサッカー部は注目を集めている。あとは、風紀委員などを作り、通学問題を解決してほしいという意見も。そのためには今後、学生一人ひとりが自覚を持った行動をとることが一番必要である。（高熊隆志）

バトントワリング 世界優勝 河津君

学長賞

奨励賞 成績優秀2人も

スポーツや社会活動で顕著な業績・功績を挙げた本学学生の個人または団体に与えられる05年度「学長賞」は、世界バトントワリング選手権（05年8月）のペア・シニア部門で優勝を飾り、同男子シニア部門でも三位に入賞した、河津修一君（競技スポーツ学科4回生）＝写真に決まった。また、「学長奨励賞」にはサッカー部天皇杯三回戦進出チーム▽陸上競技の日本選手権女子棒高跳びで8位入賞（3㍍70）を果たし、西日本インカレでも3㍍90の関西学生新記録を樹立した堀さやかさん（同）▽03年から学友会長と「びわこフェスティバル」実行委員を各三年間つとめた高島佑貴君（生涯スポーツ学科4回生）▽学業成績優秀者として大井雪乃さん（同）と藤村佑子さん（同学科3回生）の計1チーム4人が選ばれた。学長賞には副賞30万円が、学長奨励賞には3万円（団体は10万円）の育英資金が、本学教育振興会と大阪成蹊学園後援会から贈られる。



男子 バレーボール Volleyball

春季リーグは5部で、4部に昇格した秋季リーグといずれも7勝0敗でいずれも優勝を飾り、この一年で5部から3部に駆け上がった。さらに年を越した1月、大阪府学生6人制身長制優勝大会の決勝では強豪・近大を2―0で破り優勝する殊勲も。

［この1年・主な成績］
▽大阪府学生6人制身長制優勝大会 優勝▽関西大学春季リーグ5部（7勝0敗）優勝＝4部昇格▽同秋季リーグ4部（7勝0敗）優勝＝3部昇格

苦労があって今がある

主将 柿島新太郎

中学校の時に身長が170㎝以上あり、友達に「バレーボールしてみない？」と誘われたのがきっかけで始めた。最初はやる気もなく、練習を休む日が多かった。

しかし、高校では強豪の金沢商業に入学。中学時代とは意識も変わり、バレーボールに浸かっていった。

大学でもバレー部に入ってキャプテンに任命され、先輩のいないなかでバレー部の立ち上げをしなければなかった。そのとき苦労したことは、「選手の意識の統一」。単にバレーをするために入部した人、昇格を目指して入部した人。十人十色なチームをひとつにまとめることが難しかった。

その苦労があったからこそ、今がある。でも、「口で言えるようなら、それは本当の苦労とはいえない」と。本当の苦労は本人の胸の中でしか知り得ないことである。

4部優勝はあくまで通過点としか考えていない。もちろん3部・2部への昇格も目標ではなく、あくまでも通過点と考えている。

＝濱中 達也（かきしま・しんたろう 4回生 石川・金沢商高）

バレーを教える教員が夢

梶屋賢太

身長175㌢の小柄なセッター。「チームにとって必要な存在」（鴛田真司部員）と攻守ともにチームにとって要の存在である。「ボールを懸命に追うことで、仲間意識を高められる」と言い、「将来は教員志望」と勉学と部活動に励む日々を送る。バレーの楽しさ、難しさを追及しながら、バレーを指導できる教員になるために、努力を続ける。

総部員数14人のバレー部はキャプテンを軸に、週5日の練習に取り組む。平均175㌢の「早い攻撃を武器」にする小柄なチームは、7部からスタートした学生リーグで、3部まで昇格した。これも、練習から試合までを学生が自分たちで取り組んできた成果である。

ポジションのセッターは、「バレーを始めたときから、バックトスに憧れて…」と、今に至るまでそのポジションは譲らない。小・中・高と県の代表として全国大会にも欠かさず出場し、「バレーは、素人には難しいスポーツ。だからボールをつなぐことは楽しい」と、仲間と共に勝利をものにした日々を思い出す。

バレーが教えられる教員を目指すために部活動と勉学に励む日々。クラブを通じて「バレーの技術はもちろん、指導や練習メニューを考えたり、仲間との人間関係を築いていくことも学んでいきたい」と将来の目標に向かって着々と、大切な力を身につけているようだった。＝山本知可（かじや けんた 3回生 奈良・添上高）

BIWAKO SEIKEI SPORT COLLEGE The Road To VICTORY

野球 Baseball

京滋大学春季リーグで、創部3年目にして念願の1部に昇格。さらに初の1部リーグ参戦となった秋季リーグ戦では、全員野球で1部の強豪校と互角に戦った。最終週、滋賀大（6位）に延長のすえ5-3で競り勝ち、5勝8敗（勝ち点2）。花園大学と並び同率4位ながら、前回順位により5位で1部残留。目指すは神宮となった。

"仲良しクラブ"から意識改革

学生監督主将 斉藤寛樹

最初の2部では「仲良しクラブ」という意識で練習用の球場を借りながらの、日々の練習が進んでいた。しかし、この学生監督の、「勝つ野球部に意識を変えていく」という一言が、チームを大きく変えた。

初めての1部では、1部残留を最低目標に戦ってきた。このリーグが終わるや、1部でやっていけることがわかったから、再び選手一人一人の意識を変えていく必要がある。

春季リーグ戦は、リーグ1位のチームが大学野球の大舞台、神宮球場でプレーができる。「優勝を狙っていくか、残留を狙っていくか。選手一人一人が意識を変えてしっかり持って日々取り組んでいかなければ、前述は苦しい。1部残留どころか2部降格の恐れも出てくる」と、これからを厳しく見据えている。

また、今まで学生だけで戦ってきただけあって、今後もそれを崩したくないのは部員全員の願いだ。指導者がきても頼らず、自分たちを生かして活動していき、びわこ成蹊スポーツ大学野球部の伝統にしていきたい、と。＝関藤 健介（さいとう・ひろき 4回生 山梨・甲府一高）

甲子園ボーイの重圧

坂本 徹

まりこみ、毎日厳しい練習を行ってきた。「センスがズバ抜けているわけではない。その分、努力でカバーするのだ」と。

大学でもこの気持ちは変わらなかった。この努力がリーグ戦の最も重要な場面で報われた。「いつ試合に出ても打てる自信はあった。打ててほっとした」。2年間のブランクと「甲子園ボーイ」という重圧を乗り越えた顔に、ようやく笑顔がこぼれた。＝齊藤寛樹（さかもと・とおる 4回生、長崎・波佐見高）

2打席連続被弾の雪辱に燃える

投手陣の主軸 田中節祥

体の柔軟性が渡邊投手とは違うことに、すでに気付きながらも、渡邊投手のフォームに少しでも近づこうとしてきた。しかし、2打席連続でホームランを浴びるという屈辱を受けたことで、持ち前の「負けず嫌い」に火がついた。今度は「自分に合ったフォーム」の新たな模索が始まった。そして今、そのフォームも固まりつつある。

「前のリーグより良い成績を収めたい」「大学野球の締めにしたい」。田中投手の意気込みは強く、調整に余念が無い。＝大西亮暢（たなか・せつよし 3回生 愛媛・宇和島南）

秋のリーグでチーム5勝のうち3勝を挙げたのを最後に、教員への狭き門に備えるため、野球部を選手としては辞めるつもりだった。が、「このままでは終れない」。同じ打者に浴びた2打席連続本塁打が、重く心にのしかかる。変則アンダースローを武器に再びマウンドへ登る。

アンダースローのフォームにもこだわりがある。高校一年時に、「肘の使い方がうまい」と監督にほめられ転向。何回も試行錯誤を繰り返してきた。それは地上5㌢からボールを放つ千葉ロッテマリーンズ・渡邊俊介投手を理想に描いて、大学でも続けてきた。

［この1年・主な成績］
▽春季大会2部 優勝（12勝1敗0分）▽同入れ替え戦 一部昇格（2勝1敗）▽新人戦 1回戦敗退▽秋季大会1部5位（5勝8敗）

なによりも艇庫設置と部員増を

梅田康弘

一体となって進んでいる感覚、これがともかく気持ちいい。まるで、魚が飛び跳ねて泳いでいるようなんだ」と続く。

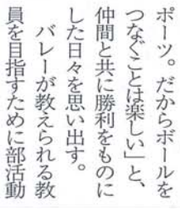
ボートとの出会いは、高校のクラブ紹介。友達から「この高校のボート部は強い」と聞き入部を決めた。部員は40人以上、とても ハードな練習が、2年時のシングルスカル選抜大会7位、3年時での同国体8位の結果に残る。

その猛練習が今も続き、キャプテンながら大津市の社会人チーム「ボンバーズ」に所属し、瀬田川で練習を行い、大学では主に陸トレ中心で、トレーニングルームで行っている。

ボート部全員の夢は、この恵まれた自然環境を活かし、大学近くの湖岸に艇庫を設置し、部員を増やして自分たちでボートを管理しながら、部員がそろって練習に励む、そんな部活動だ。＝山田 真大（うめだ・やすひろ 3回生 滋賀・瀬田工高）

ボート Rowing

現在、部員はわずか4人。部としての活動は週1回のミーティングのみで、練習や陸上トレ、目標までが全て個人任せ。滋賀県のシンボル「琵琶湖」という、他大学にはない恵まれた自然環境を活かしきれていない。



スピードの爽快感がたまらない魅力

川崎文也

「特にやりたいこともなかった中、友達に誘われて軽い気持ちで始めた」。スポーツを始めるきっかけとしてよく聞く言葉だが、「今はスピードが出て風を感じられる爽快感が気持ちいい。それに誰もが経験できることじゃないから」とボート独特の魅力を語る。

地域の社会人チームに混じって活動しており各自で所属しているクラブチームもバラバラで少し寂しい気持ちもあるという。所属チームが違うので、ボートを漕いでいる時は実質1人で活動している。

「びわこ成蹊スポーツ大学ボート部としての環境、特に初心者でも活動しやすい環境が欲しい」と言うのは今後、入部するであろう初心者では難しいだろうという思いからきている。また「他の部員もインカレに出場させてあげたい」とも語り、共に活動する時間は少なくとも部員の意識の違いはなく、目標に向かう方向性は合っている。

決して満足できない状況で仲間の成功を願い、まだ見ぬ新入部員のことも考え他人を思いやる性格の今後を、応援したくなる。＝小田康人（かわさき・ふみや 3回生 香川・坂出商高）

バトミントン Badminton

人数不足のため2年目までは団体戦にエントリーできず、創部3年目に初めて団体のリーグ戦に出場。京都学生リーグで男子は3部残留、女子は2部昇格。関西学生秋季リーグで女子は7戦全勝し5部へと昇格した。

3人で創部、試練続き

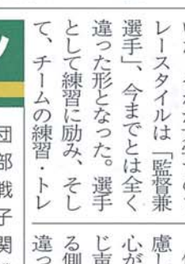
監督兼選手 河本孝弘

高校まではコーチや監督のもとでプレイをしていた。それが大学でのプレースタイルは「監督兼選手」、今までとは全く違った形となった。選手として練習に励み、そして、チームの練習・トレーニング計画を組み立て、部内での自分の位置を確認しながら、日々の練習に取り組む。それは簡単なものではなかった。しかし、「しんどい中にもやりがい」を見つけている。

個々の選手の性格も配慮しての指導を、いつも心がけているという。同じ声かけにしても、受ける側の人によっては全く違った意味となり、返ってくる言葉や態度も全く違う。だから、日々の選手に合った言葉を見つけ、指導する。そして、成果として表に現れる。これほど嬉しいことはない、という。

部員との対立を無駄にせず、反省し次に生かす。そして、お互いに成長する。バドミントンを通じて、このようなメンタル面もこの二年半で鍛えられた。失敗や喜び、手ごたえがあるからこそ、今でも「選手兼監督」を続けられるのだろう。小学3年の時から12年間のバドミントン生活で、今が一番楽しいと実感している。

将来目指しているものは、教師だ。しっかりと将来を視野に入れながら、日々、生き生きと過ごしている姿は、とても魅力的だった。＝艸川万以子、塚田久美子（かわもと・たかひろ 4回生 京都・西乙訓高）



この大学で発見〝やりたい勉強〟

米田勝彦

部員不足でリーグ戦に出場もままならなかった一年の時、京都リーグ1部校も参加する京都学生クラス別大会に、唯一の先輩と組んだダブルスで優勝した。「楽しかった、まだ戦えるなぁと思った」と振り返る。

高校は大阪大会準優勝の強豪校、個人では近畿ベスト16という実績をもつ。しかし、大学入学後、人数不足が原因で高校当時のような練習ができない状況の中、今まで通りのプレーができるかどうか、大きな不安があったのだ。

大学レベルでの自分の実力を、もうひとつ信用できないまま挑んだ大会だったが、結果は優勝。パートナーである先輩の活躍もあっただろう。が、中学から高校で培った実力がいかんなく発揮された結果であり、「1部相手でも戦える」と自信をもって言えるのは、この優勝に裏打ちされたものだ。

団体戦では現在3部。しかし、個人ではもしかすると2部にも勝てる相手がいないのではないかと思わせるほど別格の強さだ。「自信」という武器を携え、今後さらに磨きがかかっていくに違いない。＝小田康人（よねだ・まさひこ 3回生 大阪・此花高）

［この1年・主な成績］
▽男子＝京都学生3部リーグ 4勝1敗＝入れ替え戦に出られず3部残留▽女子＝京都学生リーグ3部 6戦全勝＝同入れ替え戦で京都光華大を下し2部昇格▽関西学生秋季リーグ6部 6戦全勝＝入れ替え戦 大手前大を下し5部昇格。

女子 バレーボール Volleyball

04年秋に関西リーグの9部からスタートして9、8、7部で全勝を収め、創部4年目の06年春季リーグでは6部に挑戦する。05年度は西日本インカレから全日本インカレの予選を突破してより高いレベルの本戦にも進出、地元・滋賀県の低身長選手権（165㌢以下の選手のみ）や6人制選手権大会ではいずれも3位と健闘した。

［この1年・主な成績］
▽関西春季リーグ8部 優勝＝7部昇格▽同秋季リーグ7部 優勝＝6部昇格▽西日本インカレ予選リーグ突破、本戦1回戦負け▽全日本インカレ予選リーグ突破、本戦1回戦負け▽滋賀県低身長（165㌢以下）選手権3位▽滋賀県6人制選手権3位

皆の力集めて3部へ

06年主将 橋本絵理香

バレーボールは大学から始めた。確かに周りに比べると、技術や知識は及ばない所はあるだろう。しかし、みんなをまとめる力を評価され、チームメイトからは絶大な信頼を得ている。「不安はあるけど、そんなに意気込まずに、みんなに助けてもらって頑張る」と話すように、全員で進めていくチーム作りを目指す。

次の春季リーグでは6部に挑戦する。目標は「もちろん全勝」。これから卒業するまでに、最高3部まで出場できる。6部で立ち止まっている暇はない。

「全米代表に多くの選手を送り込んでいるほどレベルの高いネブラスカ大学が五月に来校して試合が出来ることや、地域のスポーツ活動に参加できるようになったのは吉田先生のおかげ。この機会にたくさんのことを吸収したい」と新キャプテンは意欲を燃やす。＝岩田 萌（はしもと・えりか 3回生 愛知・名古屋女大高）

チーム作りとギャップの中で

05年度副主将 崎山藍子

一期生として入学した時、自分達がクラブを作らなければならなかった。可能性は無限だったが、リスクも高かった。用意された目標もなく、導いてくれる人もいない。

部活に顔を出すことも少なくなっていった。2年目に後輩が入って人数は揃ったが、意識の面での問題が大きくなった。1つ解決するとまた新たに問題は出てくる。

3回生になり問題は複雑になっていった。野外コースのゼミ活動が始まり忙しさが増していった。しかし、メンバーから相談・愚痴を持ちかけられる、よき相談相手だ。それは同期・後輩は関係ない。メンバー一人一人の思いは違う。誰もが真剣だ。

そんな皆の気持ちを知っているからこそ、メンバーのことを考えて動くことができる。今は高校の時、先生や先輩が考えていたこと、やりたかったことが理解できる。驚くほど成長を遂げ大人になった。＝中右 健一（さきやま・らんこ 4回生 和歌山・信愛高）

全米女子1位 ネブラスカ大来学へ

全米大学女子バレーボールのランク1位を誇るネブラスカ大チーム（ジョン・クック監督）が5月19日に来学、本学チームと親善・模範試合を行うほかバレーボール教室や、同大監督と吉田敏明教授らによるコーチング法をテーマとしたパネルディスカッション開催も予定されている。

ネブラスカ大は昨季、全米大学選手権は決勝で敗れたものの、05年の年間最優秀チームに選ばれ、これまで米ナショナル・チームにも数多くの選手を輩出してきた、高さとパワーともに世界レベルの水準にある。一昨年まで米女子代表チーム監督だった吉田教授がクック監督に選手選考を委嘱したり米代表Bチームの編成を依頼した経緯があり、今回の来学となった。

まだ間に合う 果敢な挑戦を

初の就職活動

就職課長　松井 茂孝

内定第一号の朗報が届いたのは寒気が緩み始めた二月、同二号は三月初旬だった。就職課を訪れる学生が徐々に多くなってきた矢先で、企業へ提出するエントリーシートや履歴書類を持ち込んでの相談、あるいはエントリー選考を通過し、一次面接の準備として模擬面接などを真剣に次々に求めてくる。他大学に比べて出遅れ感は否めない。

新設大ゆえに先輩やOBの、貴重な生のアドバイスを受けられないためで、そのハンディをどうやって補い、支援すべきなのか。三年前から「学生にプラスとなることは、全てをやろう」と就職課の学生支援が始まった。

近隣の伝統校はもちろん、遠く筑波大や順天大にまで最新の具体策を聞き歩き、大阪の企業を軒並みまわった。「一期生は部も大学も自力で作ってきた。フロンティア精神が旺盛で、指示待ち人間など一人もいません」と理解を求め続けた。ローラー作戦は、その数、実に五百社。膨大なファイルが今、就職課の壁に並ぶ。

もちろん各種のガイダンスやセミナーは、一般企業や教員・公務員など分野別に、この三年間でざっと五十回ほど開催した。昨春からは「一人一人に就職担当教員を付け、キメの細かい就職支援を」、という就職指導教員と個別に懇談・懇請し、ゼミ生に直接の語り掛けもした。

「内定が出た」の張り紙も見える就職課で企業探しをする姿が続く

三月に入って就職課への訪問はますます増えたが、実は内定第一号、二号の二人とも、雪降る十二月の寒さの中、大学が仕立てたバスで大阪での合同就職説明会に向かい、ドームを埋めた一万五千人ものリクルートスーツの集団に混じったメンバーだった。他大学並みに早くから準備を進め、真正面から立ち向かえば、結果はやはり速く出る。

景気回復による求人増、十数年ぶりの有効求人倍率の回復、07年問題と呼ばれる団塊世代の大量退職など、大学生の就職戦線にも追い風が間違いなく吹く。十一月の企業説談会（京都・都ホテル）に集まってくれたミズノやアシックスといった八十二社、百十二人の皆さんも、「日本初のスポーツ大学」に好イメージを語ってくれた。

まだ決して、手遅れではない。例えばインターンシップ実習で手にした社会人への感触を手掛かりに、分野を決めるのもいい。まず就職課に来て、ネットで自分に合う企業を探し、きちんと手順を踏めば、今からでも必ずや道は開ける。

桜便りの終わりとともに、今度は教員や公務員の採用に向けて願書配布が各地で始まる。本学学生の36%が志望する教員への道は、景気動向と関係なく、いぜん厳しい。こちらも早めの準備が求められている。

私のシュウカツ体験記

考え抜き「スポーツで感動」選ぶ

就職内定第1号　足立 賢吾

「就職なんて、何とでもなるものだ」と、軽く考えていました。なので、就職活動を始めるのも、決して早いほうではありませんでした。11月の末になって、とりあえず頻繁に就職課に足を運びましたが、最初はそれさえも苦痛でした。とにかく「絶対これになる」という明確な夢がなく、現実逃避ばかりしていました。

しかし、さすがに「このままではいけない」と感じ、「自分のやりたいことはなんなのか」、「夢はなんなのか」という事を、もう一度よく考えて悩み抜いた結果、「スポーツを通じて人を喜ばせたり、感動させたりすることができる仕事をする」と決めました。

そんな時にリクナビでゼビオ株式会社を見つけ、まずトップセミナーに参加し選考を受けました。そこで社長が「スポーツで人は感動するが、私たちはその手助けをする仕事をしている」と言った、この一言で「この会社で働く」と決めました。自分の夢を叶えることのできる会社であり、またその挑戦する気持ちをしっかり評価してくれる会社だと確信したからです。2月13日に「内定」をいただきました。

選考は「人物本位」ということで、新設の大学それも初のスポーツ大という面で知名度のハンディなどは、まったく感じませんでした。

とにかく一番大切なことは、「自分の考えをしっかりと相手に伝えること」と感じました。無理に難しいことを言おうとせず「自分の考え」を、自信を持って話すようにしました。背伸びをすることをせず、ありのままの自分を、しっかりとアピールできたことが良かったと、思っています。

（あだち・けんご　島根・安木高出身、野球部）

今 このチャンスに全力を！

アメリカンドリームの具現者

吉田 敏明 教授

そんな輝かしい経歴を持つ爽やかスポーツマンが、わが大学の教壇に立つ。「国内はもとより海外で培ってきた経験や研究を、スポーツ大学で伝えていきたい」―その強い気持ちが、この大学に来ることを決めさせた。

01年に就いた全米女子代表チーム監督で、もっとも苦労し心を砕いたのは、選手の意識改革。日本で「フォア・ザ・チーム」と呼ばれる、「イン・システム」だ。米国選手は個性がとても強く、試合でもやりたいことをどんどん実行に移す。例えばジャンピング・サーブ。監督としての戦術ではリスクが大きいと考える局面でも、選手は強く主張する。

このように、どうしても選手に我慢を強いる局面は少なくない。それを納得させるのもコーチや監督の重要な仕事。「理由を説明できる、確かな根拠を持って選手と接すれば、反発されることは決してない」。今でも確信している。しかし「個性を生かしながらも、チームを勝たせる」のが、吉田流の基本的な考え。このバレー〝哲学〟で全米女子代表を世界ランキング1位（03年）に導く、快挙をやってのけた。

しかし、そこまでの道のりは決して易しいものではなかった。高校卒業時や大学で先輩と喧嘩した時、幾度もバレーを辞めようと思ったことか。そのたびに最後は「吉田敏明からバレーを取ったら何が残る？」に戻り、コートで再びボールを追う自分がいた。それからは、米国ばかりか欧州にまでに渡って、アマ・チームをも含め一歩一歩、指導者としての勉強を積み重ねてきた。

「今その時、与えられた機会やチャンスに対し、全力で取り組む。それが大切なんだ」。世界ランキング1位になれたのも、その1つ1つの積み重ねてきた結果である。

これまで多くの監督やコーチとして試合を行ってきた中で、反省や課題が毎試合出る。その反省や課題をまとめるためにも、今は絶好の時間。「これまで実践で行ってきた経験を生かしながら、なぜ試合に勝てたのか、逆になぜ負けてしまったのかを、冷静に分析して今後の指導に生かして行く。それを、新たな目標に置いている」と語った。＝齊藤寛樹

山形県生まれ、51歳。順天大、筑波大大学院でコーチ学を学び渡米。全米女子ジュニアバレーボールチーム監督、全米女子ナショナルチーム・コーチ、日立女子、東京学芸大、ティアップ（スウェーデン）などの監督を経て01年、全米女子ナショナルチームの監督に就任。世界ランキング1位、アテネ五輪5位の実績を残す。05年4月から現職。

人間探訪

学びと実践 未来を切り開け

トップを走り、30歳から大学院進学

渋谷 俊浩 助教授

箱根駅伝（85年）「華の2区」を走り、「9人抜き」（歴代2位）の区間賞。実業団（雪印乳業）入りしてからは、わが国最古の伝統を持つ2大マラソン（びわこ毎日＝86年と福岡国際＝88年）でともに優勝を遂げ、この偉業を達成した瀬古利彦（当時早大）、宇佐美彰朗（同日大）とともに、名マラソンランナー列伝に名前を連ねる。

競技歴とは別に、もう一つ光り輝くのは、「筑波大大学院修士課程修了」ではないだろうか。30歳からの社会人再入学。トップレベルを文字通り走り続けるだけでも、至難の業なのに、いわば「文武両道」を極める果敢な挑戦だった。

「いや、そんな大袈裟なことではない。ただ、激動の時代になるであろう将来のために、様々な高度のスキルを身に付け、社会の変化に対応しなければならないと考えただけ」と、言葉少なに語る。

しかし、雪印乳業で選手からコーチとなり、監督として活躍していた00年7月、いわゆる「雪印食中毒事件」という、思いもかけなかった〝災難〟に遭遇する。陸上競技部は廃部、同社での競技人生が終わった。「せっかくここまで来たのに」という、悔しい思いが募るばかりの日々。過去の栄光を捨て、新しい道への模索が、約一年も続いた。

サラリーマン生活が続いたある日、「新しい大学の立ち上げを手伝ってくれないか」との要請が来た。まだ名前も決まっていない、全くのゼロからの開学準備。「やりがいは十分にある」と、感じた。「人生はマラソンと同じ」とはよく言われる。が、どのレースもコースも違えば競争相手も違う。毎回が、いわば「ゼロから」始まる戦い。

「陸上ラブです」。そう語る眼には、少し青みがかったサングラス。目立つのはそれだけではない。このキャンパスではまずお目にかかれない「大人びた雰囲気」が漂う男。それもそのはず、今年で29歳。

しかし、独特の雰囲気を放つのは年齢だけではない。他の学生が持っていない、社会に一度出たことがある経験から。「陸上競技をするため」に摂南大工学部に入学、4年間競技に打ち込み、4百㍍リレーでインカレ出場も。一度は就職して営業職を経験したものの、夢が捨てきれずに「スポーツを極めたかった、スポーツ用品の勉強をしたかった」と、再び大学生に戻った。

兵庫県加古川市生まれ、43歳。筑波大学卒業後、雪印乳業陸上競技部で選手・コーチ・監督として活躍。社会人入学で筑波大大学院でコーチ学を学び、94年同大学院体育研究科修士課程修了。指導者として日本陸連強化委員、実業団チーム監督などを務める。03年4月から現職。

陸上競技
Track and Field

女子棒高跳びで堀さやか選手が日本選手権（6月）での8位入賞（3㍍70）を皮切りに、京都選手権（7月）でも3㍍70を記録し、西日本インカレ（9月）では3㍍90の関西学生新記録を樹立した。男子は熊田大選手が中・長距離の様々な大会で好成績を残した。団体ではびわ湖大学駅伝に予選会4位で勝ち進んだものの、本番ではタスキ渡しに手痛い不運も出て24位に留まった。

［この1年・主な成績］
▽日本選手権女子棒高跳　堀さやか⑧3㍍70▽日本インカレ同⑤堀さやか3㍍50、女子1000㍍競歩⑫谷中美有紀24分23秒90▽西日本インカレ女子棒高跳び⑤堀さやか3㍍90＝関西学生新、男子1500㍍③熊田大3分55秒89、女子5000㍍競歩③谷中美有紀24分23秒90▽近畿選手権男子800㍍③熊田大3分54秒49、同1500㍍⑥熊田大3分54秒33▽関西学年別選手権1500㍍③澤田浩志・水谷勇・基遊津嘉秀真・水田貴幸・大八木雄介・中西悟・椿拓也）4時間33分56秒　24位▽関西学生女子駅伝（池側愛・平尾朋美・望月智子・高見美帆・谷中美有紀・沢田美紀）⑩1時間52分03秒

BIWAKO SEIKEI SPORT COLLEGE

The Road To VICTORY

「オンリーワン」質の高い大学文化を創出せよ

学長　森 昭三

開学時からの念願の一つであった大学新聞の発刊が、学生と教員の共同作業によって実現するという。こんなうれしいことはない。4年目の快挙である。どのような新聞になるか楽しみである。本学の大学文化の一面を創出することになる。それだけに、読み応えのある質の高い、話題性のある〈オンリーワン〉と言われる大学新聞に成長することを、希求したい。

新聞発行の継続と質の高さは読者があってのことである。作り手は、読者の反応が欲しいものである。一読者であることにとどまらず、学生及び教員一人一人がよき取材者として、新聞づくりに積極的に参加したらどうであろうか。読者としての楽しみが倍増するに違いない。

Opinion

地域とのつながりを

副学長・学部長　飯田 稔

昨年4月に着任早々、大阪成蹊学園全体の情報システム規制や予算不足が原因でスポーツ大学独自の情報システムができていないという話を何人かの教員から聞いた。そんな状況の中で、須田泰明教授を代表とする研究テーマ「WEBの立ち上げ、情報流通の円滑化による新たなキャンパス・コミュニケーションの形成、ならびに情報行動・意識の変化にかかわる研究」が本学の〇五年度共同研究として採択された。

マネジメント・情報コースの実習の一環として、学生も参画してこの取り組みが始まった。キャンパスだけでなく、大学近隣の人々からもインタビューによって情報を収集、発信すると聞く。大学と地域のつながりがまた一つ増すことになる。

成果を期待しています。

水泳
Swimming

総部員14名で競泳と水球に分かれるが、ともにメンバーが足りないことから「インカレ個人出場」を目標に掲げて、朝夕の週10回練習に取り組む。関西学生選手権での1部昇格を目指し練習に励む。

遠回りして見つけた道

坂本貞男

本格的に水泳を始めたのは3歳の時。姉の影響でスイミングスクールに通い始めた。しかし、中学校に入学すると思いがけない出来事が、水泳を辞めるきっかけになってしまう。

「中学校では、必ず部活に所属しなくてはならなかった。何回も、スイミングスクールを部活の代わりに認めてくださいと、熱心に頼んだが認めてくれなかった」。こうして生きがいでもあった水泳を、諦めることになった。生きがいを失って県立高校を自主退学、非行にはしった。自宅を飛び出し、「親との縁も切った」ところまで。

しかし、「ある日、このままだと取り返しがつかないと思ったんです」。そして大検で大学進学を目指す決意を固め、姫路YMCA学園へと入学した。そこで、ある教師と衝撃的な出会いをすることになる。「絶対怒らなかった。こんな俺のことでも、差別をしないで接してくれた。俺も教師になって、俺みたいなドロップアウトした奴や、ヤンチャな奴らのためになりたい」と、再び生きがいを見つけることになった。そして大検に合格し、再び泳ぐことを決意する。

「日本選手権出場と教師が目標」と真剣な眼差しで再び生きがいを取り戻し、自信を持った決意で泳ぎ出した。

＝佐保孔明・花房和美（さかもと・さだお　4回生　兵庫県　大学検定）

テニス
Tennis

開学からの2年間は、専門の指導者もいなかったためにがむしゃらに練習し過ぎた。しかし今年は'04年アテネ五輪代表監督、フェドカップ'05日本代表監督の植田助教授を迎え、ようやく練習環境が揃った。

［この1年・主な成績］
▽関西学生選手権　女子シングルス　高屋 桃絵　ベスト16▽全日本学生テニス選手権　女子シングルス　高屋 桃絵　1回戦敗退▽昭和の森ヘッドオープン 2005　女子シングルス　高屋 桃絵　優勝

全国ランク50位へ再挑戦だ

植木大輔

近畿大を卒業しての編入。「近大ではテニス漬けの4年間だった。教師になるため、勉強とテニスの両立を求めて」、再び大学の門をくぐった。「親が教師であったため幼心に自分も教師になりたいと思うようになった」のだという。今は多くの機会を指導者としてコートに立つ。

全国中学選手権に出場、全国高校選手権ではシングルスでベスト4、団体でもベスト4。近大の先輩から推薦を受け1年生にして全国学生選手権のベスト8入りを果たした。その後も順調に全国大会へは4年連続出場を果たしたが、成績はいずれもベスト16。遠巻きに見れば快挙だが「関西大会では調子が良くても全国では奮わなかった」と冷静に振り返り、「もう一度、ベストの状態まで鍛えなおし、日本テニス協会のランキングで50位以内に入る自信がある」と、選手としての目標も語った。

「将来の夢は、中学校の教師になり、テニス部も、先は切り開けない」。力が入った。

＝山田優子

柔道
Judo

選手1に主務1の計2人が続く。マルチアリーナの柔道場や学外の東レや滋賀県警、出身高校などで稽古に励む。部の目標は、何よりも部員数を増やし、団体戦に出ることを目標としている。

［この1年・主な成績］
▽滋賀県60キロ以下級2位。関西学生大会初出場

孤軍奮闘にケガが追い打ち

それでも夢を追う主将　楕松兵庫

部員は去年と変わらず選手1人と主務1人。3回生になっても期待していた新入生は来ないまま、いまだ1人で東レ滋賀などに出向き、高校生などと共にひたすら黙々と練習に励んでいる。

この3年間というもの、相次ぐケガに悩まされ続けている。1回生のときは練習にバイクで向かう途中に転倒し、左膝前十字靱帯が切断。

3回生になった夏、今度は兼部しているラグビーの練習で怪我を負い、柔道での初の公式戦も無残な結果に終わった。それでも柔道をあきらめない。

なぜ、こうも柔道にこだわるのか。

実は「自分は五輪に出て金メダルを取る」という自信を、何故か持っている。さらに将来の夢として、「青年海外協力隊に入り発展途上国で柔道を教える」が、あるのだ。

シドニー五輪で野村忠弘選手の活躍を見て、「自分と同じ体格の小さい選手でも、五輪で勝てる」ことに感激、野村選手を目標に据えた。海外協力隊への2年間は、その間も五輪への思いは捨てないのだから、帰国後も柔道にとってプラスになるだろう、と。

どこまでも夢への道筋を描き続け、柔道の稽古に黙々と一人で励む。

＝山田優子（あべまつ・ひょうご　4回生　京都・東山高、二段）

必死の結果が魅力に

城下知香

「インカレの個人出場」を目標に掲げ、昨年の夏以降、競泳と水球の総主将として部を任される。「限界まで自分を追い込むことが好き」と高校時代の「泳がされていた」頃とは違い、大学では「自らの弱点を克服しよう」と、再び泳ぎに対して向き合うと、「今になって、厳しかった高校時代のコーチの言葉が理解できた」と、自から学ぶように変身した自分に、気付いた。

競泳のメンバーが足りず、「現段階での2部昇格は厳しい」と、個人のインカレ出場を目標に掲げるが、水球にも参加するうちに「チーム競技」の良さを実感する。お互いをフォローし合えることは楽しいが、「自分を必死に追い込み、結果としてタイムが伸びる競泳は頑張りがいがある」と、水泳の魅力を熱く語る。

去年はあと一歩の「0・1秒のロス」で個人のインカレ出場を逃すが、今年は競泳一本で自分の力を出し切りたいと闘志を燃やす。

「水泳のコーチ」になることが夢。そのためには今、新しい自分を切り開き、「一生懸命ですごい」と周りから主将として認められる存在になりたい、と語る。

＝山本知可（じょうした・ちか　3回生　大阪・大阪成蹊女子高）

［この1年・主な成績］
▽関西女子水球大会　5位決定戦▽京都学生選手権水泳（男子）最終成績　5位（女子）100㍍自由形③城下知香1分03秒95▽西日本女子水球　8位▽近畿秋季女子水泳　3位▽男子3部400㍍自由形①森脇照人4分31秒08▽1500㍍自由形①森脇照人4分12秒64▽100㍍平泳ぎ②藤田剛史1分08秒95▽200㍍平泳ぎ②藤田2分30秒30▽女子2部100㍍自由⑤城下1分02秒33▽400㍍メドレーリレー⑤如阪・細見・城下・津守5分00秒66▽200㍍フリーリレー⑤城下・如阪・細見・津守1分58秒49